

2014 年

国 語 (A)

(時間 50 分)

<解答を記入するときの注意>

1. 試験開始のあいずがあるまで開かないこと。
2. 受験番号は解答用紙の定められたところに記入すること。
3. 解答は解答用紙の定められたところに記入すること。
4. 文字はていねいに書くこと。
5. 答案ができあがっても終了のあいずがあるまで着席し、指示にしたがって提出すること。

高 輪 中 学 校

一 次の問いに答えなさい。

問 一 次の傍線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- 1、大統領は国民の前で改革をメイ¹ゲンした。
- 2、その建物は数百年前に造られたのに全くイ²タンでいなかった。
- 3、生徒会長へのコウホ³者をつのつた。
- 4、彼はとても律⁴儀な人だ。
- 5、それが私の性⁵分だ。
- 6、最⁶寄りのコンビニエンス・ストアはどこですか。

問 二 次の漢字（全て音読みで考える）の中で「し（て）」と結びついて「し（て）」という言葉になるものを全て記号で答えなさい。（例、「愛」＋「し（て）」↓「愛し（て）」など。また「命」＋「し（て）」↓「命¹じ（て）」のように「し」に濁点がついても構わない。）

ア、想 イ、感 ウ、生 エ、事 オ、案 カ、思 キ、時 ク、期

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数に制限がある場合は、句読点や記号も字数に含まれるものとします。

名詞というのは、わたしたちにとって、¹とりかえのきかない、とても重要な言葉です。ところが、そのとても大事な言葉である名詞に、この頃、いままでにはなかったような広がりをもった変化が起きてきているように思われます。

その言葉でなければならぬものを言い表すのが、本来、名詞という言葉のもつちからでした。ちょうど、自分の名前という名詞なしには、自分という存在はないように、です。

「名は体を表す」と昔から言われるように、名、すなわち²名詞というのは、実体をもった確かさを感じさせるような言葉です。その名詞を聞けば、その名詞が表しているものがはっきりと感覚される。名詞という言葉は信じられる言葉でした。

そうしたとりかえのきかない言葉であるはずの名詞のありようが、しかし、いまは違ってきています。名詞が必ずしも確かさを感じさせる言葉でなくなっています。

カタカナの名詞、平仮名の名詞、ローマ字の頭文字をならべた名詞、略字の名詞。³首をひねる商品名もふえました。聞いてわかる、見てわかる名詞と云えない名詞が、暮らしの情景や町の空気を一変させることもすくなくあります。

わたしの住む町の駅前はずっとあった銀行は、合併や何やかでこの十年に四度、銀行の名を変えたあげく、結局、駅前の支店はなくなることになり、駅前から銀行の名詞そのものがなくなりました。経済行為の結果としての、名詞の変更、名詞の消滅が、⁴いつか無造作におこなわれて、不思議でなくなっています。

アジサイと言われれば、花の名とわかります。しかし、ハイドラ⁵ンジアと言われると、（A）わかりません。ハイドラ⁵ンジアはセイヨウアジサイの名です。あるいは、バーベナ。バーベナはふだんに目にすることも多い身近な花ですが、それでもバーベナと聞いてそれがビジョザクラのことだとは、知識がなければわかりません。

名詞は（B）名指す言葉、名乗る言葉です。けれども、地名なども由来を無くした言葉がめつきり多くなり、人の肩書、大学の学科などでも、⁵ただの記号になっています。もじり、つぎはぎ、語呂あわせ、おもしろがり、その名を聞いてすぐにわからないような名詞が氾⁶濫し、人の名にしても無理読みがどんどん増えて、ふり仮名なしには読めないほう

が、もはや普通と言うべきかもしれません。

名詞が確かさをもたらす言葉だったのは、名詞というのが、わたしたちの社会的な経験を集合する力をもっているためです。逆に言えば、⁶社会的な経験を集合できなくなれば、たとえだれが強制しても社会的な力をもつことはできず、放り捨てられて忘れられます。不良債権となってしまう名詞が、いまは少なくありません。

名詞という言葉に深いこだわりをもちつづけた作家の井伏鱒二さんの、「アスナロの木」という文章を思い出します（『在所言葉』修道社）。

井伏さんの郷里にある福山城は、ぜんぶアスナロの木を使っている、三百何十年もの年代を経てなお、木肌がきれいで、白木の匂いがした。作家はアスナロの木に憧れるようになります。ある日、奥州平泉中尊寺が、八百五十年の星霜を経た建築なのに、すべてアスナロの木を使っているためにわずかの風化を見せているにすぎないことを知って、作家は、（C）アスナロの木に憧れをもつようになる。

それでアスナロの森を見たいと、⁷切に思うようになり、青森下北半島でようやく全山アスナロの森に出会う。まる一日中歩き通しても行き尽くせないような大森林で、井伏さんは、アスナロの森の「⁸鬱気といふやつ」、深い山で感じられる特有の冷気に打たれます。昭和二十年代の終わり、一九五〇年代の話です。

そのとき森を案内してくれた人に、アスナロが奥羽地方でヒノキ、北陸ではアテ、またはクマサキ、木曽ではアスヒというのだと教えられます。アスナロにはよく知られる伝説があります。元来、この木には名前がなかった。ある日、この木が自分のほうが松や杉より偉いのだと言った。そこで他の木々が「そういうお前は何の木か」と咎めると、「わしはヒノキにアスナロウ」と答えたという伝説です。

アスナロは、ヒノキの葉を八倍位にしたような外見をしている。コノテガシワにも似ている。しかし、コノテガシワはせいぜい二メートル位の小木なのに、アスナロは樹齡三百年位になると、高さ三十メートルにもなる。あるとき井伏さんは、甲州天神峠で二十メートル以上もあるようなコノテガシワの珍しい大木を見ます。「こんな大きなコノテガシワは今にお化けになる」と炭焼きの人に言ったら「お化けになるのは大きな椿の木だ。あの木はナンジャモンジャの木といって、盆地の者が目印にする木だ」と教えられる。但し後に、⁹塩山のお寺で見たナンジャモンジャの木は、葉のきわめて細いとても小さい木だったと、作家は書いています。そして「名前不詳の木にナンジャモンジャの木というこの名称を与えるしきたりがあるのだろうか」と記しています。

井伏さんの書いているのは、木の名前が、⁸いかにその土地その土地の日に根づいた、目印の言葉であるか、ということとです。アスナロにしてもナンジャモンジャにしても、むりに名づけない、わからないものはわからないままに、日々のなかに大切にしてく、そういう心の働きが、いまはともすれば忘れられています。

何でも彼でも名づけて、逆に、言葉の森の「⁹鬱気といふやつ」が、名詞という言葉になくなってしまった。「名が体を表さず」というふうになった。そんな今の名詞のありようが、¹⁰わたしたちの心のありようやものの考え方に投げかけてくる影、ひずみ、心の闇というものに、もつと自覚的でありたい。そう思うのです。

《長田 弘『なつかしい時間』より》

問一（ ）A、Cに入る語としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使わないこと。

ア、ますます イ、もともと ウ、なかなか エ、いろいろ オ、よくよく

問二 — 4「いつか」・8「いかに」と同じ使い方のものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

4
ア、ここにはいつか来たことがある。
イ、その本はいつか読んだはずなのだが。
ウ、まだこの道は工事中だがいつか開通するだろう。
エ、勉強に夢中になっているうちにいつか夜もあけていた。

8
ア、その後の少年の運命はいかに。
イ、学校生活をいかに過ごすべいか。
ウ、桜が満開の頃はいかに美しいことだろう。
エ、いかに言っても考えを変えようとしな。

問 三 — 1 「とりかえのきかない」とありますが、それはなぜですか。解答欄の形式にあうように、文中から二〇字以内で抜き出しなさい。

問 四 — 2 「名詞というのは、実体をもった確かさを感じさせるような言葉です」とありますが、その理由を文中から二五字程度で抜き出しなさい。

問 五 — 3 「首をひねる商品名」とありますが、なぜ「首をひねる」のですか。三〇字以内で答えなさい。

問 六 — 5 「ただの記号になっています」とは名詞がどのようなものになっていることですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、難しい名詞が氾濫し、意味を理解するのに知識を必要とするようになっていくこと。
イ、名詞がその対象を明確に示しておらず、形式的に用いられるようになっていくこと。
ウ、手を加えられ、発音せずとも目で文字を見れば内容がわかるようになっていくこと。
エ、外来語をそのまま使ったり、符号を使ったりして対象を示すようになっていくこと。

問 七 — 6 「社会的な経験」について、この後の木の名前についての話の中で、「社会的な経験」にあたるものは何ですか。文中から一〇字程度で抜き出しなさい。

問 八 — 7 「切に思うようになり」とありますが、なぜ井伏鱒二はこうに思うようになったのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

問 九 — 9 「鬱気といふやつ」とは、ここではどのようなものですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、何の技巧も凝らしていない言葉のありのままの姿。
イ、それぞれの言葉自体に感じ取られる独特のおもしろみ。
ウ、緊張して身が引き締まるような言葉の持つ神秘的な力。
エ、言葉の深みに真剣に向かい合わずにはいられない雰囲気。

問一〇 — 10 「わたしたちの心のありようやものの考え方」に対して、本来のありようはどうあるべきですか。その内容が述べられている部分を、文中から四〇字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数に制限がある場合は、句読点や記号も字数に含まれるものとします。

九月末の土曜日。

保育園の運動会が開催された。父母も応援に来るというので、統子は朝から豪勢な三段重弁当を作り、智康がまだ寝ているうちに場所取りのためにシートを敷きにいった。すでになかな数の、シートやテーブルセットやらが置いてあった。

雲が多かったけれど晴れ間も出ていて、絶好の運動会日和だった。去年は雲ひとつない炎天下で、体調を崩す子どもも多かった。

智康はもくせい組の場所で待機なので、シートには統子と両親の三人だ。折りたたみ椅子を持ってきたらしい両親二人は、すっかりくつろいで座っている。

ひさしぶりに会う父は、少し疲れているように見えた。前に会ったときより痩せたみたいだ。

「おとうさん、元気？」

サンバイザーをして、目を細めて運動場を見ている父に声をかけた。

「なんだい急に。見ての通り元気だよ」

「ならいいけど。ちよつと痩せたかなって」

統子たちの会話に、耳をそば立てていた母親が割って入る。

「おとうさんなんて元気よ。どこも悪くないわ。今ダイエットののために、夕方ウォーキングしてるのよ。もう少し痩せたほうがいいんだから。体調が悪いのはわたしのほうよ。めまいが最近ひどくって、いろんな病院行って検査してもらってるんだけど、原因がわからなくていやになっちゃう」

そうなの、としか言いようがなく、実際「そうなの」と統子はこたえた。それだけではあんまりかと思い「お大事にね」と付け加えたら、母は、

「ほんと、あなたってつめたい人間だわねえ」

と、統子をにらんだ。

驚きのあとに、羞恥と怒りが瞬時に統子を取り巻いたが、気付かないふりをしてやり過ごした。

父が片眉を上げて、統子に目配せする。統子は笑ってうなずいた。自分は昔から父に救われてきたと、統子は思う。すっかり少なくなつて白髪になった父の頭を見て、なんともいえないさびしさを感じる。六十八歳の父。これからどのくらい生きてくれるだろうか。二十年後は八十八歳。智康は二十四歳で、統子は六十一歳だ。今の父と自分が同じ年代になることが、統子には不思議なことのように思えた。

たのしげな音楽がスピーカーから鳴り響き、放送が入る。園児たちが入場し整列をする。年少組未満の乳児組は、保護者と一緒だ。歩き回ったり泣いたりダダをこねたりと、見ているだけで笑みがこぼれる。

体操のあとは、年中もくせい組と年長きんせい組の綱引きがあり、父は近くまで行ってビデオ撮影してくれた。母が声援を送る。智康が顔を真っ赤にして綱を引く。見ているこちらまで力が入った。最後は相手側に引きずられるようにして、ずるずると前に滑ってゆき、みんなでごろりんごろりん転がった。

「あはは。あれ見てよ。おつかしいわねえ。みんな転んじやったわよ。トモくん、よくがんばったあ！」

母が満面の笑みで手を叩く。

いくつかの競技が続く、もくせい組の親子競技の放送が入った。保護者は入場口にお並びください、と流れる。

「わたしじゃなくてもいいのよ。おとうさん行けば？」

統子が父に声をかけると、少しの間躊躇したが、よしっ、と言って立ち上がって統子にビデオカメラを渡した。

「ばっちり撮ってくれよ」

そう言って、入場口に向かう。

「おとうさん、はりきっちゃってるわねえ」

母が笑う。

「あの人、トモくんがかわいくてしょうがないのよ。ほら、男の子をずっと欲しがってたから」

初耳だった。特に智康びいきをしていると感じたこともなかった。

「あなた、もっと遊びにいらっしやいよ。親孝行しなくちゃだめよ。あの人、自分からは言えないタイプなんだから」

統子にとって、苦手な母のほうがなぜか ⁵ 近い存在で、会話がほとんどなくなつた父は、好きだけれど ⁶ 遠い存在だつた。自分がほんの少し心をやわらかくすれば、もつと両親に歩み寄れるのかもしれない。

もくせい組の競技は「太鼓でドン！」というもので、親子でスタートし、途中で仮装（子どもはゼッケン、保護者は帽子とタスキ）し、その先にある大太鼓と小太鼓を交互に二回ずつ打って、手をつないでゴールするという競技だ。

智康と父はスタートはよかつたけれど、父が帽子をかぶってからタスキをかけようとして、タスキが帽子に引っかかってなかなかかけられずに、結局ゴールは最後だった。それでも二人は大きな笑顔で、太鼓をたのしそうに叩いてゴールテープを切った。

あいちゃんはお兄ちゃんと競技に参加した。高校生のお兄ちゃんは、あいちゃんを宙に浮くほどの勢いで誘導し、そのグループのなかではぶつちぎりのトップだった。あいちゃんのお兄ちゃんはおおげさではなく、まるでアイドルグループの一員のようにかつこよかった。

もくせい組の徒競走では、智康と大輝くんが同じグループでコースも隣同士だったので、統子は少しだけ不安だったが、智康は思い切り腕を振って走り、二位の大輝くんを大きく離してゴールした。母が大きな声援を送る。統子の心配は杞憂 ^{きゆう} だった。子どもは、しごくまつとうな正しい心を持っている。

⁷ ああの電話以降、今日のはじめて大輝くんママと会ったが、どうやら統子のことを避けているようだった。挨拶 ^{あいさつ} をしようとしたところ、あからさまに顔をそむけられ無視された。心穏やかではいられなかったが、なるべく気にしないことにした。

そのあとにダンスがあり、玉入れがあり、鈴割りがあつた。大空の下、園児たちはいきいきとうれしそうだ。お弁当もおいしくて、智康の額を流れる汗や、小麦色に焼けた肌に反射して輝く産毛 ^{うぶげ}、子どもらしいふくらはぎの、それでも男の筋肉をそなえているふくらみなどが、統子にはまぶしかった。

最後にメインのきんせい組の鼓笛隊演奏 ^{こてき} があり、毎年のことだけれど、観客席には涙ぐんでいる人が多かった。

「子どもってというのは、出し惜しみしないからいいんだよね」

父が言う。

「自分の持つてる力を余すところなく使うだろ。自分たちはせいぜい六割程度だものなあ。あんなふうに一生懸命に、ぜんぶの力を見せつけられると感動しちゃうよなあ」

父の瞳に水分が多く見えるのは気のせいだろうか。統子はまた二十年後を思い、⁸ 父の薄くなった肩を見て、さみしさを感じた。子どもの頃、父は大きくて強くて、なんでも知っている存在だった。⁹ 子どもはいつしか親と肩を並べ、追いついてゆく。

閉会式で智康は、園長先生に感謝のメダルを首にかけるといふ役を仰せつかり、無事にはたせた。統子は運動場の土埃 ^{ちぼろ} で、すっかりごわつた髪に手をやりながら、¹⁰ 今年もいい運動会だったとしみじみと思つた。

《椰月 美智子『かつこうの親 もずの子ども』より》

（注） ああの電話以降…大輝くんと智康はもともと親友であるが、大輝くんのママから、智康が大輝くんをぶったり蹴ったりしているとの苦情の電話があり、それ以来二人の関係はぎくしゃくしていた。

問 一 ― 1 「羞恥と怒り」を説明したものとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、母親に内心を見透かされていることへのきまり悪さと、無遠慮にけなされたことへの怒り。
 イ、欠点を自覚させられた体裁の悪さと、いたわりの言葉をねじ曲げてとらえられたことへの怒り。
 ウ、体調の悪さに気づけなかった面目なさと、自分の欠点をたな上げて他人を責めることへの怒り。
 エ、人前で注意された恥ずかしさと、優しい言葉をかけたにもかかわらず理不尽に非難されたことへの怒り。

問 二 ― 2 「目配せする」とありますが、この行為の意味することとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、気まずい雰囲気を少しでもなごませようとおどける。
 イ、統子の気持ちを理解していることをさりげなく暗示する。
 ウ、母との対立をさけた態度を分別ある大人の態度だとほめる。
 エ、今日は子どもの運動会なのだからけんかなどするなとたしなめる。

問 三 ― 3 「親孝行」とありますが、ここでは具体的にどのようなことを指しますか。一〇字程度で答えなさい。

問 四 ― 4 「あの人、自分からは言えないタイプなんだから」とありますが、父のこのような性格が行動から読み取れる一文を文中から抜き出し、始めの五字を書きなさい。

問 五 ― 5 「近しい存在」とありますが、統子が母に対し、このように感じるのはなぜですか。三〇字以内で答えなさい。

問 六 ― 6 「遠い存在」とありますが、統子にとって父が「遠い存在」であることに気付かされた出来事を、文中の言葉を使って答えなさい。

問 七 ― 7 「子どもは、しごくまっとうな正しい心を持っている」とありますが、統子がこのように感じた理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、親同士は感情的な対立からお互いを避け合っているのに、子ども同士はお互いを避けずに徒競走で勝負をつけようとしているから。
 イ、親同士は徒競走の結果次第でさらにお互いの関係が悪くなるのではと心配しているのに、子ども同士は勝敗など一向に気にしないようだから。
 ウ、親同士はちょっとしたことでめめて、ずるずるとそれを引きずっているのに、子ども同士はそんな影響をみじんも感じさせず、一緒に徒競走に打ち興じているから。
 エ、親同士は関係がぎくしゃくしている中で、お互いの子どもが一緒に競技に出ることをこころよく思っていないのに、子ども同士はすっかり元通りの仲良しに戻っているから。

問 八 ― 8 「父の薄くなった肩を見て、さみしさを感じた」とありますが、なぜ父に対して「さみしさ」を感じたのですか。三〇字以内で説明しなさい。

問 九 — 9 「子どもはいつしか親と肩を並べ、追い越してゆく」とありますが、この時の統子の心情の説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、遠い存在だった父の衰えを見るにつけ、改めて父が身近な存在に思えるようになってきている。

イ、父の衰えを見るにつけ、子どもの頃に抱いていた父のイメージが失われていくことを嘆いている。

ウ、父の衰えを見、子どもの成長を見るにつけ、子どもの頃に抱いていた父のイメージに智康が近づいてくれることを願っている。

エ、父の衰えを見、子どもの成長を見るにつけ、父と自分に起きていることが、自分と智康にも同じように起きていることを実感している。

問一〇 — 10 「今年もいい運動会だった」とありますが、統子はどのような点に関して「いい」と思ったのですか。簡潔に説明しなさい。

【以下余白】

受験番号
※